

若き友へ

2012年1月5日

経済学部教授 高島 均

所感 11-4 グアテマラ通信その4-乞食の人生-

あなたは、乞食の人生というものを考えたことがありますか？ ここ、アンティグアに住んでいると、通りのあちこちに、物乞いをしている人々を見受けます。ここで見る物乞いをしている人たちは、アメリカで見た物乞いのホームレスたちとはちょっと違います。アメリカで見たホームレスたちは、ボール紙に、施しを求める文章と神の祝福を願う文章を書いて、赤信号で交差点に停まる車の周りを歩き回って施しを求めています。それが、自分にできる精一杯の労働だ、という信念を持って歩き回っているかのようです。勿論、帽子か空き缶を前に置いて、黙って座っているだけの人もいますが、それは極めて少数です。それに対して、ここでは、小さな子供を抱えた母親、手や足が片方無い片端になった男たち、小さな子供をつれたお婆さんたち……が、ただ、黙って俯いて手を差し出していたり、汚れたお皿を手を持って差し出しています。中には、通りかかる人々に施しを求めてぶつぶつ言いながら手を差し出す人もいますが、それは、極めて少数です。

アンティグアで、道路に座り込んで物乞いをしている人を見ていると、子供のときの横浜や銀座の情景を思い出します。その頃、日本はまだ貧しく、街のそこそこに物乞いをしている人々がいました。母に手を引かれて歩いている中で、物乞いをしている人々を見るにつけ、気の毒に思った記憶がありますが、気の毒に思っただけで、そのまま忘れていきました。可哀想に思っても、いくらかの施しをしても、彼らのその先の人生を考えたことはありませんでした。でも、毎日毎日、同じ人が同じ場所に座って、じっと身動きもせずに手を差し出したまま日をすごしているのを見ていると、ああ、この人は一生こうしていき、死んでいくのだという思いが頭に浮かび、いたたまれなくなります。

今まで見たホームレスや物乞いの中で、一番痛ましく思ったのは、7年ほど前、カナダのバンクーバーで見た年頃の娘を連れて年老いた父親でした。さぞかし、人並みに身綺麗にしたかろう年頃の娘に、ぼろを着せたまま、スーパーのカートに身の回りの全財産を入れて、道端に捨てられたタバコの吸殻を拾いながら歩いていく年老いたホームレスを見、その心中を押し量って本当にいたたまれなくなりました。自分一人ならまだしも、年頃の娘を連れてくるのです。でも、その人の人生の先行き、あるいは娘の人生の先行きに思いをめぐらせはしませんでした。

私自身が、人生の終わりが見えてき、自分の最後の時をどのようにして迎えるか、その時までどのように生きていったらよいのか、日々思いを馳せることが多くなった所為でしょうか?じっと手を差し出して身じろぎもしない物乞いを見るにつけ、その人の人生を思っ居た堪れなくなります。死ぬときまで、手を差し出してじっとしているのです、それが彼らの人生なのです。

(2012年1月5日了)